

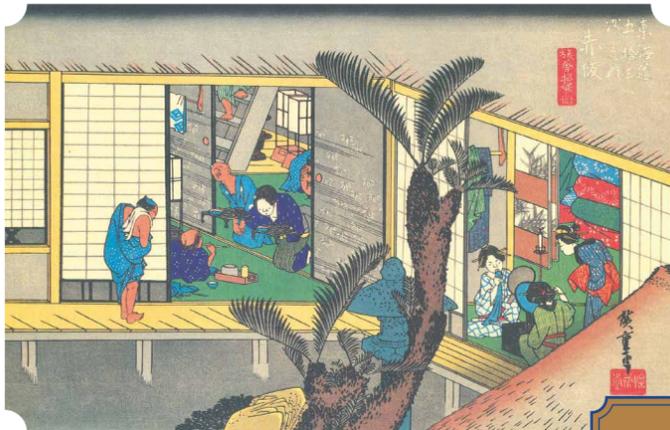
東海道五十三次を往く

第29回

赤坂宿

芭蕉や広重も訪れた 長い歴史を刻む大橋屋

多くの旅籠が立ち並んだ赤坂宿。御油宿からの距離は東海道の中で最短で、この地を訪れた俳人・松尾芭蕉は、御油宿を出てあつという間に赤坂宿に着いてしまう様子を「夏の月御油より出でて赤坂や」という句で表現した。約200年前に建てられた旅籠「大橋屋」や、その庭で浮世絵師・歌川広重が描いたソテツの樹など、江戸時代の姿を彷彿とさせるものが街道沿いに点在し、ロマンを感じさせる。



大橋屋（旧旅籠鯉屋）
広重の画に描かれているのは、ゆったりとくつろぐ旅人たちと、甲斐甲斐しく世話をする飯盛女たちで活気づく大橋屋の庭。最盛期の赤坂宿には、旅籠や茶屋が約80軒も存在したという。

1649（慶安2）年に創業した大橋屋。現存する建物は、1809（文化6）年の赤坂宿の大火の後に建てられたものといわれている。現在は改築の歴史などを伝える記念館となっているが、なんと2015（平成27）年までは、宿として営業を続けていたというから驚きだ。



浄泉寺
大橋屋の裏手に位置する浄土宗 浄泉寺。赤坂薬師や石造りの三十三観音、石仏がずらりと並び、百観音の霊場として有名。境内には、広重がモデルにしたという推定樹齢約270年のソテツの樹が移植されている。



広重画のソテツの木



高札場
目につきやすい宿の中心にあった高札場は、復元した高札が立つ広場に。



本陣跡
4軒あった本陣のうち、松平彦十郎家は江戸時代初期から務めた格式高い本陣であったと思われる（左）。赤坂陣屋は三河国の天領支配の拠点であり、幕末に三河県ができると、陣屋跡に県役所が建てられた（右）。



赤坂陣屋跡（三河県役所跡）

御油宿に続き、遊興の地として旅人たちをもてなした赤坂宿。歴史を感じる建物が大切に残される宿場町で、タイムスリップ気分を楽しんだ。